平成２６・２７年度 文部科学省指定 和歌山県教育委員会指定

「課題解決に向けた主体的･協働的な学びの推進事業」における

「学力定着に課題を抱える学校の重点的･包括的支援に関する実践研究」

研 究 紀 要

【研 究 主 題】

「自ら考え、学び合い、意欲的に学習する子どもの育成

～国語科における言語活動の充実をめざして～」

期日：平成２７年１１月２０日（金）

会場：和歌山県新宮市立王子ヶ浜小学校

ご　あ　い　さ　つ

皆様におかれましては、ご多用中のところ「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究」研究協力校指定研究発表会にご参会いただきありがとうございます。

さて、本校では平成２６年度（研究指定初年度）、学力向上の委託研究をスタートさせるにあたって、全国学力・学習状況調査、和歌山県学習到達度調査結果等の分析を通し、本校児童の実態および学習課題の把握を行いました。その結果、自己肯定感や学習に取り組む意欲が低い傾向がみられることや、基礎的・基本的な知識・技能の定着、そしてこれらを活用した、思考力・判断力・表現力の育成に課題があることが明らかになってきました。そこで、研究の中心を国語科に置き、学習指導要領において主となる重点事項である「言語活動」充実のための取組を全職員で協議し、研究主題を「自ら考え、学び合い、意欲的に学習する子どもの育成　～国語科における言語活動の充実をめざして～ 」と設定し、学力定着に係る課題克服に向けた研究を推進して参りました。

研究推進にあたっては、外部講師として京都教育大学附属学校部 指導教諭　戸田 和樹先生からご教示いただき、子どもたちが自分の思いや考えをもち、教師はそれを大切に扱っていくことが国語科の学力アップにつながるという戸田先生のご指導を取り入れ、視写・日記・作文指導を大切にした多様な読みを中心に据えた授業実践・授業改善に取り組んできました。また、教科指導を支える実践として「ことばの力」向上に向けた読書活動推進等の活動も地道に進め、徐々にではありますが成果が見えてきました。

研究指定２年目の今年度は、「研究実践部」「課題解決部」「学力充実部」の３つの研究部会を組織し、全職員がそれぞれの部会に所属し、授業実践や研究仮説実証のための授業改善、全国学力・学習状況調査分析、和歌山県学習到達度調査分析、補充学習の充実、家庭学習の充実、ドリルタイムの充実等を推進する一方で、「和歌山県学力向上推進プラン」「和歌山の授業づくり基礎・基本３か条」をもとにした本校の学力向上推進計画に沿った実践を進め、児童の学習意欲と学力の向上及び授業研究の活性化に取り組んでいる段階です。

本日は、幾度にも亘りご来校頂きご指導を仰いでおります戸田 和樹先生に、学力向上と国語の授業という演題でご講演をいただきます。

本研究発表会にご参加頂いた皆様には、本校の研究、実践についてご指導、ご批評をいただき、誠に拙い実践ではございますが、今後の研究に生かして参りたいと考えておりますのでよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、昨年より本校の研究活動を支え、ご指導いただきました戸田 和樹先生ならびに「きのくに学力定着フォローアップ事業アドバイザー」の惣坊 やよい先生、和歌山県教育委員会・新宮市教育委員会の皆様に心より感謝を申し上げます。

平成２７年１１月２０日
新宮市立王子ヶ浜小学校
校長　　林　　眞　一

目次

ごあいさつ

Ⅰ　学校の概要と教育
　１　本校の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　２　本校の教育　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　３　教育目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

Ⅱ　研究の概要
　１　主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　　（１）課題の克服に向けた取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　　（２）具体的取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　２　研究仮説
　　（１）研究の進め方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
　　（２）研究に係わる取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
Ⅲ　研究三部会の取組
　１　研究実践部
　　（１）主体的に学習に取り組む児童を育成するための授業改善　・・・・・・・　8
　　（２）言語活動の充実　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
　　（３）本校独自テスト作成と実施　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
　　（４）学習意欲と学力向上　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
　　（５）成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
　２　課題解決部
　　（１）ドリルタイムプリントの作成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
　　（２）読書環境の充実　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
　　（３）鉛筆の持ち方指導　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
　　（４）教室掲示の工夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14
　　（５）成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14
　３　学力充実部
　　（１）取組のねらいと目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　15
　　（２）取組の経緯と内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　15
　　（３）成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18

Ⅳ　本研究の成果と課題

【資料１】学習指導案様式
【資料２】「生活意識アンケート」〈平成２６、２７年度実施〉の結果
【資料３】全国学力・学習状況調査児童質問紙〈平成２６、２７年度実施〉の結果
【資料４】「家庭学習のてびき」
【資料５】「家庭学習のてびき」に関するアンケート
【資料６】「家庭学習のてびき」に関するアンケートの集約結果〈例〉

おわりに

Ⅰ　学校の概要と教育

１　本校の概要

（１）住　所　　和歌山県新宮市田鶴原町２丁目１０番１号

（２）位　置　　東経１３６度００分３３秒　　北緯３３度４２分２６秒

（３）設　立　　平成２５年　４月　　（蓬莱小学校・王子小学校統合による）

（４）地域の実態

本校学区は、新宮市東南部の太平洋に近い海岸沿いに位置しており、昭和４０年頃までは、農漁業・製材業・製紙業に従事する家庭が多かった。市の中心部より若干離れていて不便な反面、周囲にゆとりのある家並みの地域であったが、近年田畑や山地が住宅地に様変わりし、保護者の職業も多様化してきている。既に、漁業に従事する家庭もなく、専業農家もなく、製紙業も撤退し、製材業に従事する家庭も減少してきている。それに伴って人口も漸減の傾向にある。松山地区には養護施設があり、本校には在園児童が通学している。単親家庭は近年減少傾向にある。

地域住民の学校に対する思いは深く、教育に対する関心も高い。また、公民館活動もさかんであり、学校行事などに対して協力的で育友会活動も活発である。特に、学年活動や専門部活動は伝統的に熱心で、年間計画を立てて会員主体の意欲的な活動を続けている。

（５）児童の実態

本校児童は、明朗で人なつっこく、子どもらしいところを多く持っている。ただ、本校の子どもたちを取り巻く家庭的、社会的状況は大きく変化しており、その影響が高学年の子どもたちにある種の閉塞感を感じさせている。こうしたことから、子どもたちの基本的な生活を整え、自尊感情を育成することから、学力の向上につなげていくことを目指したい。

２　本校の教育

王子ヶ浜小学校では、上記の実態をふまえ教育実践の努力点について、次の８項目を掲げて取り組んでいる。

○学習規律を早期に確立し、自ら考え、学び合う授業を目指す。

○子どもが意欲を持つ、好ましい学級（学習）集団をつくる。

○豊かな心情と感性を育むために教室や学校の学習環境を豊かにする。

○子どもの学習や生活実態を把握し、そのニーズに応じた教育を実践し授業力の向上を図る。

○豊かな思いやりの心を育むために、人権教育、道徳教育、特別支援教育の充実を図る。

○強くて健康な体力づくりのために、体育の授業、体育的行事の充実、保健指導、安全指導の充実を図る。

○保護者や地域（下田児童館・浮島児童館・紀南学園・公民館など）との連携を密にする。

○王子幼稚園や城南中学校との幼・小・中の連携を密にし、就学前１年・義務

教育９年間を見通した教育を実践する。

３　教育目標

自分で考え、豊かな心と逞しい心身を持ち、意欲的に活動できる児童を育てる。 ～生きる力につながる「知」・「徳」・「体」・「食」を育てる～

この目標を達成するために、３つの指導目標を設定した。

３つの指導目標

〇確かな学力（一人で生きる力に関わるもの）

・基本的な学習規律が身についている子ども
・基礎的な学力が身についている子ども
・発達段階に応じて自分で判断し、問題を解決できる子ども

〇豊かな心（みんなと生きる力に関わるもの）

・仲間と仲良く、意欲的に活動することができる子ども
・仲間と話し合い、問題を解決することができる子ども
・仲間の気持ちを理解し、自分の思いも伝えることができる子ども

〇逞しい心身（自分らしく生きる力の関わるもの）

・好ましい生活習慣・食習慣を身につけている子ども
・自分の健康状態を知り、生活にいかすことができる子ども
・自分なりの方法で体力を育てることができる子ども

Ⅱ　研究の概要

研究主題
自ら考え、学び合い、意欲的に学習する子どもの育成 ～国語科における言語活動の充実をめざして～

１　主題設定の理由

本校では、全国学力・学習状況調査の分析を行い、授業の研究、指導方法の工夫改善などに努めてきた。さらに、学力向上に向けての研究を推進すると同時に、児童を取り巻く学習環境や生活環境を見つめ直すことを通して、本校児童の課題についても追究してきた。

分析の結果、本校児童の特徴として、自分に対してマイナスの感情を持つなど自己肯定感の低い児童が多いことが分かってきた。学習については、与えられたことは習得しようとするが、自分の考えを持ったり、お互いに高め合ったり、意欲的に取り組んだりすることや、人前で自分の意見や考えを発表することが苦手であるなどの課題がある。また、最後まで問題に対峙する粘り強さにも課題が見られ、特に記述問題の無解答が多いという実態も分かってきた。

そこで、児童が自分の意見や考えを持ち、お互いに学び合い、練り合い、高め合い、意欲的に学習する授業を実践することによって、本校児童の課題が解決されると考え、本主題を設定した。

（１）課題の克服に向けた取組

研究主題を「自ら考え、学び合い、意欲的に学習する子どもの育成　～国語科における言語活動の充実をめざして～」とし、児童が自分の意見・考えを持ち、お互いに学び合い、練り合い、高め合い、意欲的に学習する授業を実践する。

全国学力・学習状況調査の分析結果から、国語科に対する意欲や学習内容の定着に課題がみられることから、国語科を軸として研究を進める。同時に、ことばを使って自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行う能力を高め、語彙力やことばを論理的に組み立てる力を身につけるために、全ての教育活動において、言語活動の充実を図る。

（２）具体的取組

○「ことばの力」の取組強化（→Ｐ１３）
○校内研修による指導力向上（→Ｐ４）
○「ドリルタイム」の充実（→Ｐ１３）
○「学びの時間」における補充学習の推進（→Ｐ１０）
○「家庭学習のてびき」の有効活用（→Ｐ１５）

２　研究仮説

国語科では、その活動のすべてが言語活動と考えられることから、研究の視点をより明確にするために、以下のような仮説を設定した。

多様な音読（読む）活動と書く活動を行うことにより、国語を楽しむ態度を育てるとともに、国語の力を培うことができる。

※研究仮説設定に伴い、学習指導案の様式を統一した。（【資料１】学習指導案様式 参照）

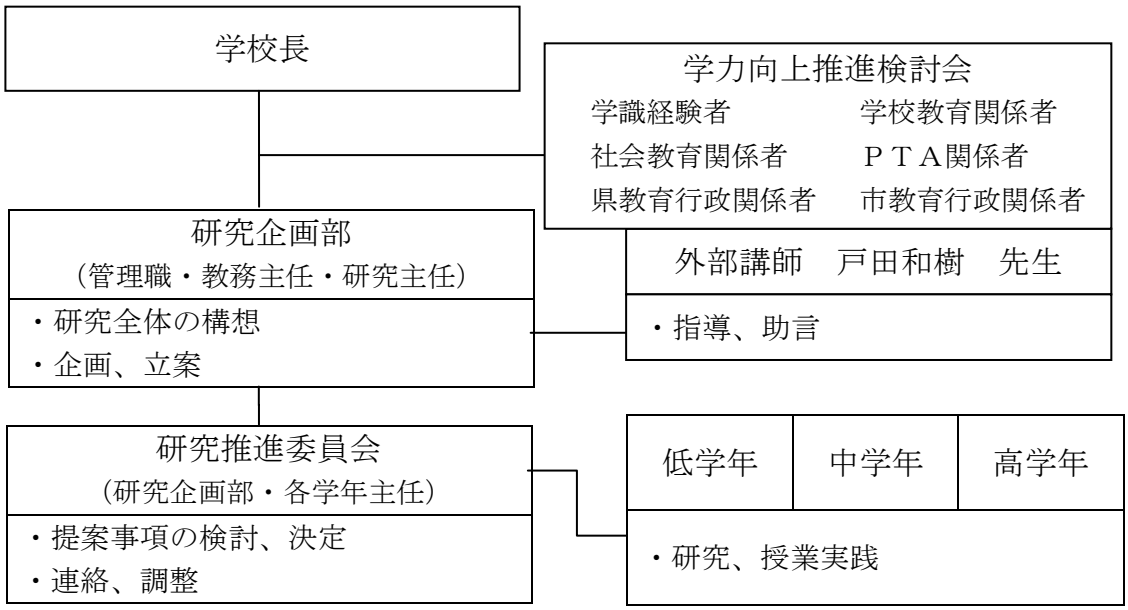
（１）研究の進め方

①　校内研究体制

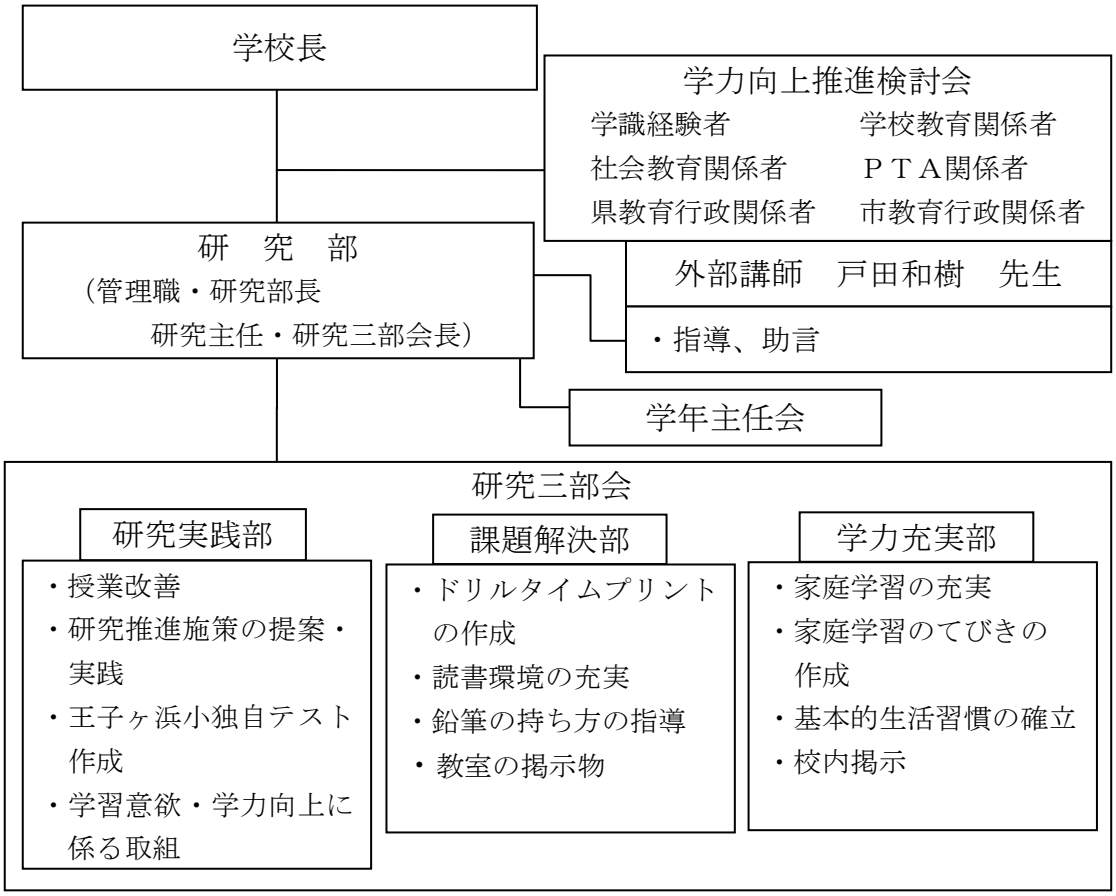
校内研究体制としては、昨年度、研究企画部で企画・立案し、研究推進委員会で検討・決定するという流れで進めてきた。それによって、二年次への見通しを持った一貫性のある取組を行うことができた。また、各学年・学級で授業実践を積み重ねてきたことにより、年度末には目指す授業のベースを築くことができた。

今年度は、昨年度の取組を基盤とし、より一層組織として動くことができるように、「研究三部会」を立ち上げた。全職員が研究に主体的に取り組み、部会が活性化することで、各部会の研究が充実した。また、それぞれの部会で話し合った内容や決定したことを、全体に提案し、共通理解を図ったうえで取組を進めた。

【平成２６年度】



【平成２７年度】



②　研究の内容

研究仮説を検証するために、平成２６年度は「子どもたちに、この単元でどんな力を付けたいのか」を明確にし、それにふさわしい言語活動を位置付け、多様な音読と視写（部分・ことば）から思いを語らせ、交流する授業を展開した。

また、平成２７年度は前年度の授業研究を土台に、「視写・音読したことばや文をもとに思いや考え、気づきをつくり、それらを自分のことばで表現する活動」を位置づけた授業の構築を目指した。

研究授業を積み重ねる中で、「音読・視写から思いを語り、交流する授業」の構築については京都教育大学附属学校部　戸田和樹先生にご指導いただいた。

（２）研究に係わる取組

平成２６年度			
6 月 20 日	戸田先生来校・講義	「国語科学習における教室の基礎基本」	全学級公開
7 月 4 日	研究授業（２年３組）	「スイミー」	
10 月 3 日	戸田先生来校・師範授業	「リレー詩」の授業	３年２組
	戸田先生来校・講義	「秋の句会」 「狂言いろはの指導」	
10 月 31 日	研究授業（あおぞら学級）	「おおきなかぶ」	
11 月 5 日	研究授業（５年１組）	「天気を予想する」	
11 月 7 日	研究授業（６年２組）	「やまなし」	
11 月 10 日	研究授業（あおぞら学級）	「校外学習の計画を立てよう」	
11 月 28 日	研究授業（４年２組）	「ごんぎつね」	教育委員参観
12 月 12 日	京都教育大学附属 京都小中学校訪問	３年ろ組　河合晋司教諭 「ゆうひのてがみ」	師範授業 研究協議
1 月 22 日	研究授業（１年１組）	「たぬきの糸車」	
1 月 31 日	和歌山県教育実践研究大会	ポスターセッション 「学力向上の取組」	
2 月 6 日	戸田先生来校・講義	「平易平明な授業とは」	
3 月 6 日	和歌山県学力向上推進検討会		全学級公開 研究報告
平成２７年度			
5 月 8 日	戸田先生来校・講義	「国語科学力アップを目指して取り組んでいただきたいこと」	全学級公開

6月5日	河合晋司先生 師範授業及び協議	「白いぼうし」の授業	４年１組
6月18日	研究授業（５年２組）	「千年の釘にいどむ」	
7月3日	京都教育大学附属 京都小中学校訪問	３年は組　深蔵心理教諭 「もうすぐ雨に」	師範授業 研究協議
8月6日	教育センター学びの丘 指導主事来校研修	「Ｑ－Ｕの活用について」	
8月17日	戸田先生来校・講義	「独自テスト・指導案について」	
8月17日	和歌山県学力向上推進検討会		研究報告
9月10日	研究授業（３年２組）	「すがたをかえる大豆」	
9月11日	戸田先生来校・協議	「指導案検討」	学年単位
9月17日	和歌山県教育委員会 指導主事来校研修	「単元を貫く言語活動について」	
10月30日	和歌山県学力向上推進検討会		研究報告 全学級公開

※研究授業は全て教育委員会訪問

Ⅲ　研究三部会の取組

１　研究実践部

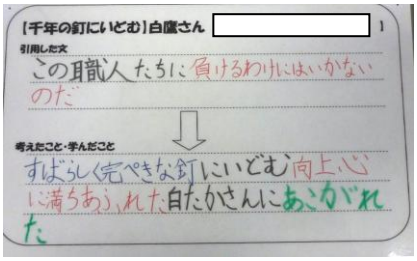
（１）主体的に学習に取り組む児童を育成するための授業改善

本部会では、授業改善をすすめるための共通理解として、教師にとっても、子どもにとっても、楽しく・分かりやすい「平易平明な授業」を心がけてきた。「思いの共有」「ともに楽しむ」を、常に念頭におき授業を行った。

「思いを共有する」とは、一人の子どもの発言を学級全体で共有すること。一人の発言をどう聞いたかを友だちに問い、その答えを発言者に返すという活動を大切にしていく。そういう営みを積み重ねることで、学級は、「どんな意見も受け入れてもらえる」「一人ひとりが大切にされている」という安心感で満ちあふれていくと考えている。

「ともに楽しむ」とは、子どもにとって楽しい授業は、教師にとっても楽しい授業であるということ。その楽しさをともに味わうという姿勢を大切にし、子どもの発見をともに喜び、子どもの悲しみを共有する。そうした学級では、子どもたちのつながりが強く、互いに支え合う精神が培われていく。

この２点を押さえた授業を続けることで、子どもたちは自らの思いをつくり、語ることができるようになると考えている。



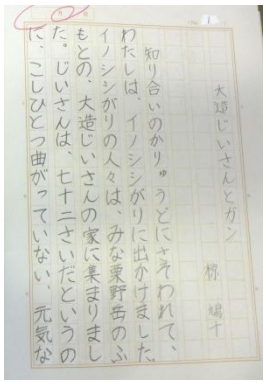
そこで、「視写・音読から思いを語り、交流し、書いてまとめる授業」の構築を目指してきた。その活動の主たるものが、“視写から思いを語らせる”である。具体的には、今日扱う部分を音読し、扱いたい言葉を視写し、さらに音読させ、交流することで、児童の発言を学級で共有していく。そうすることで、重要な言葉に着目させ、その言葉を獲得させるような展開をしてきた。

さらに以下の３点についても、重点的に取り組んだ。

①　音読の重視

多様な音読（一斉読み、グループ読み、個人読み、指音読、指黙読など）を行う。授業の中でも繰り返し音読を取り入れてきた。しかし、ただいろいろな読み方をすればよいのではなく、どんな意図やねらいを持ってその読みをさせるのかが重要だと考えている。音読により授業が活性化し、内容理解が深まるという、音読の効果も実感することができた。

②　視写の活用


大造じいさんとガン　椋　場十
知り合いのかりゅうどにさそわれて、
わたしは、イノシシがりに出かけました。
イノシシがりの人々は、みな東野岳のふ
もとの、大造じいさんの家に集まりまし
た。じいさんは、七十二さいだというの
に、こしひとつ曲がっていない、元気な

教科書教材の全文視写・部分視写、子どもたちが使えるようにしたい言葉の視写に取り組んできた。文章を「手で読む」、つまり「ていねいに一文字ずつ書く」ことにより、音読だけでは気づかなかったことや言葉に気づくという意味でも視写の重要性を感じることができた。

指導の際には、「ゆっくりと力をこめて書く」ことをさせた。書いているうちに、情景や登場人物の気持ち、文意に思いを馳せることができるようになってほしいと考えている。

③　日記・作文指導

日記や作文を書くことは、書くという習慣を身に付けさせ、表現することへの抵抗感をなくし、自己の表現を他者に紹介されることに慣れさせるなど、国語科の授業を底辺から支えるものである。

子どもたちが書いた文章を、読み合いながら交流することにも取り組んだ。交流の目的は「話題の共有」である。書かれている内容と同じような体験を持っている子どもに話をさせたり、その話をどのように聞いたかを作者に話させたりしてきた。話題の共有を進めることで、そうした内容を書いた子どもの存在を認めていくことにもつながっていくと考えている。

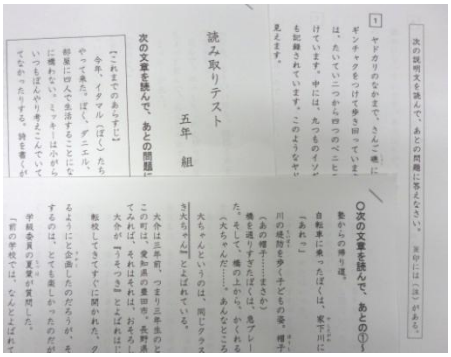
（２）言語活動の充実

単元を貫く言語活動の視点では、当該単元で身に付けさせたい力を明らかにし、その力を育成するために最適な言語活動を設定することを心がけた。さらに、その言語活動の特徴をしっかりとらえ、教師自身も事前に作ったり行ってみたりすることで、子どもたちがつまずきやすい箇所や指導のポイントがより一層明確になった。「『モチモチの木』を読んで、心に残った文とその理由を書いた読書カードをつくる」、「『ごんぎつね』を読んで、登場人物の性格や気持ちの変化を中心に感想絵巻を作る」など、単元のゴールを明確にすることで、自分たちの学びがどこに向かっているのかを常に意識しながら見通しの持てる学習となった。

また、研究仮説とのかかわりの中での言語活動として、課題にそって一人ひとりに思いや考えを持たせ、交流し、その時間の学習を自分なりの言葉で書いてまとめる活動を中心に授業を構築した。

交流するなかで、自分の意見を受け入れてもらえること、一人ひとりの感じ方に違いがあること、自分の思いや考えが広がったり深まったりすることを知り、主体的に学習に取り組む姿勢が少しずつ身に付いてきた。活動を積み重ねることで、国語を楽しむ態度を育み、国語の力が培われた。

（３）本校独自テスト作成と実施


次の説明文を読んで、あとの問題に答えなさい。

1 ヤドカリのなかまで、さんご礁に
ギンチャクをつけてゆき回っています
は、たいていニつから四つのべこと
けています。中には、九つものイソ
も記録されています。このようなヤ
見えます。

読み取りテスト

五年　組

次の文章を読んで、あとの問題に

〔これまでのあらすじ〕
今年、イタマル（ぼく）たち
やって来た。ぼくとダニエル、
部屋に四人で生活することにな
に慣れない。ミッキーはふがら
いつもぼんやり考えこんでいて
てなかったりする。詩を書くが

○次の文章を読んで、あとの
塾からの帰り道。
自転車に乗ったぼくは、家下川に
（あれっ）
川の堤防を歩く子どもの姿。
（あの帽子……まさか）
後を追りすぎたぼくは、急ブレー
た。そして、橋のよこから、かくれる
（大ちゃんだ……。あんなところ
大ちゃんというのは、同じクラス
3大ちゃん」とよばれている。
大介は三年前（つまり三年生の
この町は、愛知県の豊田市、長野県
てみれば、それはそれは、おそろし
大介が「うそつき」とよばれは
転校してきてすぐに聞かれた、グ
るようにと企画したのだろう。そ
するのは、とても楽しかったのだが
学級委員の夏実が質問した。
「前の学校では、なんとよばれ

次の説明文を読んで、あとの問題に答えなさい。（文中には〔注〕がある。）

1 ヤドカリのなかまで、さんご礁にギンチャクをつけてゆき回っています。たいていニつから四つのべこと…

読み取りテスト　五年　組

次の文章を読んで、あとの問題に…

〔これまでのあらすじ〕
今年、イタマル（ぼく）たち…

○次の文章を読んで、あとの…

塾からの帰り道。
自転車に乗ったぼくは、家下川に…
（あれっ）
川の堤防を歩く子どもの姿。…
（あの帽子……まさか）
後を追りすぎたぼくは、急ブレー…
た。そして、橋のよこから、かくれる…
（大ちゃんだ……。あんなところ…
大ちゃんというのは、同じクラス…
3大ちゃん」とよばれている。…

教師が独自に作成したテストの実施は、単元で子どもたちに身に付けさせた力を、別の教材を使って評価することをねらいとしている。

独自テストを作成することは、教材を見きわめたり、適切な設問を考えたりすることになり、教師自身の国語力を培うことにもつながる。

また、子ども一人ひとりの実態を個別に把握したり、学力の推移を継続的に追跡したりすることを通して、一つ一つの課題をより明確にし、解決策を講じることに役立てていきたい。

（４）学習意欲と学力向上

①　「学びの時間」の設定

趣　旨	◎個別に支援を要する児童の基礎学力の定着を図る。
内　容	○授業中に理解しづらかったところを、もう一度学習する。 ○少人数で学びなおす。
時　間	○毎週火曜日　１４:５０～１５:２０
体　制	○全児童を対象とし、全職員で指導する。

学びの時間が特設されるまでは、補充学習の時間は休み時間や放課後になりがちだった。そのため、短時間では十分な成果を上げることができないばかりか、授業時間以外にも学習させることで、子どもたちの負担が大きいという現状があった。そこで、計画的に位置付けた補充学習の時間を設け、学力向上を図る取組が、「学びの時間」である。

②　デジタルドリル教材の活用

主要教科のデジタルドリル教材を次のように活用している。

・ＰＣ室で、各教科の「単元テスト」や「教科書復習テスト」に、一人ひとり自分のペースで取り組む。
・興味や意欲、めあてに応じて、上の学年の内容に挑戦したり、下の学年

に戻って復習したりする。
・学習履歴を参考にして、つまずきの把握やふりかえりに役立てる。
・各学年の内容が月別、単元別に収められているプリント教材を印刷して補充学習などに活用する。

③ hyper-QU（よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート）の活用

学力向上を図るためには、何よりも「学習意欲」を高めることが重要である。「もっと分かるようになりたい（できるようになりたい)」という気持ちは誰もが持っているものであるが、不安や心配ごとを抱えていては、十分にその能力が発揮されない。安心できて居心地がよく、自分の良さを認めてもらえる環境を整える必要がある。

そこで、hyper-QU を、昨年度は第５・６学年、今年度は全学年で実施した。診断結果からは、現在の学級がどのような状態にあるのか、個々の児童の学校生活における意欲、学級満足度尺度での相対的位置などを確認することができた。

また、結果をより効果的に活用できるよう、外部講師を招き職員研修（「概要と見方」「活用のしかた」）を行った。この研修により、児童が個々に抱える問題を確認し、学級集団に対する教師の対応や学級経営を改善するための指針として活用することができた。

学年別診断結果の分析・検討については、当該学年に関わる教員だけでなく、管理職、養護教諭、学習支援推進教員とともに行っている。特に要支援群にいた児童に対しては、回答項目をさらに詳しく分析することで、学年・学級において、その子が輝ける場を設定するなどして、相互に認め合えるような活動を支援した。

このように、個々の回答結果を詳しく見ることで、その児童に応じた適切な手だてを講じ、学校組織として多角的に見守り、全体で関わることができた。その結果、実際に学級満足度が上がった児童もいる。

さらに、hyper-QU の診断結果と和歌山県学習到達度調査をクロス分析してみると、学習意欲に関する質問項目（以下に記述）の平均値が高い児童の平均正答率が、本校の学年平均正答率よりも高くなっていることが分かった。つまり、「hyper-QU の学習意欲に関する質問項目の平均値が高いと学力も高くなる」ということである。

本校では、この質問項目に着目して児童・集団の実態を把握しながら、一人ひとりの児童にとって適切な教育実践となるよう心がけながら学力向上につなげている。

※学習意欲に関する質問項目
・「勉強でできなかったことができるとうれしい。」
・「授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き。」
・「よい成績をとったり勉強ができるように努力している。」

（５）成果と課題

＜成果＞

・部分視写に継続して取り組んだ結果、自分の意見や考えを発表する際、視写した文や本文の叙述を根拠に発言できるようになった。

・日記を毎日継続することで、書くことへの抵抗が減り、些細な日常の出来事も教師に書いて伝えたいという子どもが増えた。

・学びの時間の設定によって、子どもたちの個別の課題に対応しながら、一人ひとりの学習状況を把握して指導を行うことができるようになった。

・hyper-QU の実施結果を活用するための研修を行った結果、児童の課題を個々に確認することができ、学級集団に対する教師の対応や学級経営の改善に向けて、指針を得ることができた。

＜課題＞

・友達の思いや考えを聞いても、最初の自分の考えにとらわれ、自分の思いを広げたり深めたりすることに課題が見られる。

・自分の思いや考えを持つことはできても、それをみんなの前で発表することに苦手意識を持っている子どもはまだ多い。

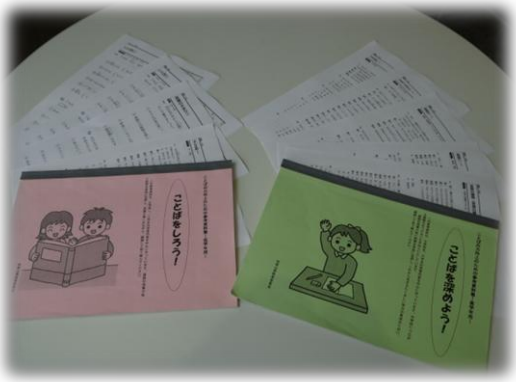
・子どもの想いをつなげ、広げていくための声かけや示唆、音読を評価する際の言葉など、子どもたちに意欲を持たせたり、主体的に活動させたりする手だては、まだまだ研究途上である。

・独自テスト作成により、子ども一人ひとりの課題を明確化することができた。しかし、個々に対し、どのように対応していくかが今後の課題である。

・デジタルドリル教材については、各学年の内容が単元別、月別に収められているため、補充教材として有効であるが、教材の利点を十分に生かしきれていない面もあるので、さらに充実した活用ができるよう検討していきたい。

２　課題解決部

（１）ドリルタイムプリントの作成



本校では、毎日昼休み後の１０分間『ドリルタイム』という時間を設け、基礎学力の充実を図ってきた。学習内容は、漢字、慣用句や文法、視写、計算などであったが、各学年・学級担任の裁量によるところが大きく、全学年を通して系統性がなかったことなどを踏まえ、今年度は、研究課題である言語活動の充実にしぼって、ドリルタイムの時間を活用できるよう検討を重ねてきた。

そこで、「ことばの力向上のための参考資料集（和歌山県教育委員会）」やデジタルドリル教材などから、語彙や文法、文作りなどのプリントを本部会でとりまとめて活用に生かした。

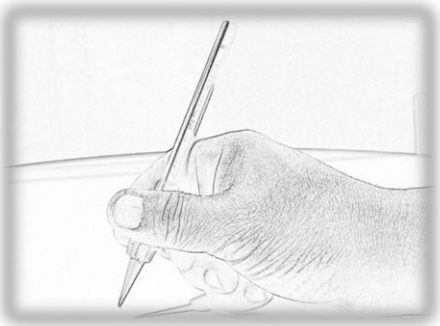
（２）読書環境の充実

図書室の開放時間以外でも図書を利用できるよう、学級に図書を置いて、読書を促してきたが、本年度の全国学力・学習状況調査においても、読書量の低さが課題となった。

そこで、今年度は、オープンスペースや廊下に、テーブルや椅子、本棚などを設置して、くつろいで本を読んだり歓談したりできる空間づくりを行った。

学校の図書だけでは十分ではないため、数十冊まとめて借りることのできる新宮市立図書館のサービスも利用している。

（３）鉛筆の持ち方指導



１つのことを克服し、技能を習得することは、自分自身の自信や自尊心の向上につながる。そして、その自信は、他の技能や学習を習得しようという意欲につながる。このような考え方から、鉛筆の持ち方の指導を全職員で取り組むことにした。

１学期には、１年生のしょしゃ（学校図書）に掲載されている「えんぴつのもちかた」の写真を各学級に掲示し、常に正しい持ち方を意識できるようにした。

さらに、いつも自分自身で意識してもらうために、９月下旬には、全児童に補助具を配布し、意識づけをしてきた。

（４）教室掲示の工夫

教室の掲示物については、学習規律「発表のしかた」や「授業の足跡」など、先進校の実践例を一つのモデルとして様々な掲示のしかたを職員間で紹介し合い、共有を図った。

（５）成果と課題

＜成果＞

・ドリルタイムで繰り返し学習することにより、自分自身で問題を考え抜こうとする気持ちが高まった。
・登校直後や空き時間などわずかな時間を利用して読書をするなど、児童にとって本がより身近なものとなった。
・学習の基本となる鉛筆の持ち方を全職員が共通理解の基に指導したことで、正しい鉛筆の持ち方に対する児童の意識が高まり、改善もみられた。

＜課題＞

・図書コーナーが充実するためには、頻繁に図書の入れ替えをすることや、読み聞かせや紙芝居などの活動で、児童にとって魅力的な空間であり続ける工夫が求められる。
・鉛筆の持ち方指導については、児童自身が途中であきらめず克服しようとする気持ちを持ち続けられるような働きかけが必要である。
・教室の掲示物については、各学年や学級の実践において効果があったと思われるものを、学級や学年の枠を越えて共有化していくことが望まれる。

３　学力充実部

（１）取組のねらいと目的

本校児童の実態として従来から家庭学習の時間が少なかったり、全くしていなかったりする児童が多いという傾向が見られる。(【資料２】「生活意識アンケート」の結果〈平成２６、２７年度実施分〉、及び【資料３】全国学力・学習状況調査の児童質問紙の結果〈平成２６、２７年度実施分〉参照）そうした課題を解決するために、家庭学習を充実させていくことを含め、自ら学習を進めていける児童の育成にむけた手立てを考え、取組を続けている。今年度は、本指定研究の機会に、学力充実部としてこれまでの取組を振り返り、主に次の２つの取組をすすめている。

・「家庭学習のてびき」（改訂版）の作成と、その活用の推進
・校内への「詩文などの作品」を掲示

（２）取組の経緯と内容

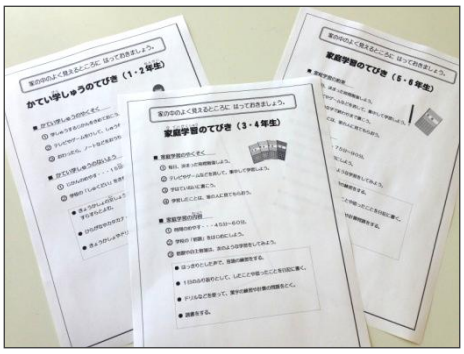
①　「家庭学習のてびき」（改訂版）の作成と、その活用の推進

本校では「家庭学習のてびき」というリーフレットを作成し、各家庭に配布している。種類は、「低学年用」「中学年用」「高学年用」の３種類で、それぞれの学年に応じた「ねらい」や「約束ごと」、そしてどのような学習をしたら良いのが分かるように、家庭学習の「内容」について具体的に例を示している。「家庭学習のてびき」の作成にあたっては、これまでは次のような方針で行ってきた。

・「低学年」「中学年」「高学年」単位で、年度初めに内容の修正を行う。
・「ねらい」は共通とし、「約束ごと」「内容」の修正作業は学年担任の裁量とする。

今年度については、まず昨年使用したものを「従来版」として、学力充実部会で「従来版」を基にした修正作業を行った。それを原案として、次に各学年で修正作業を行い、「改訂版」を作成した。今年度の修正は、主に次のような方針で行った。

・原案の作成は学力充実部で行う。
・「従来版」の記載内容を基に、項目や内容の変更は最小限にとどめる。
・従来通りの３種類を作成し、「ねらい」「約束ごと」「内容」に統一感を持たせる。



原案の作成にあたっては、これまでの取組の成果を活かしたうえで、記載内容について使われる言葉や表現を揃えたり、項目の数や順番を見直したり、

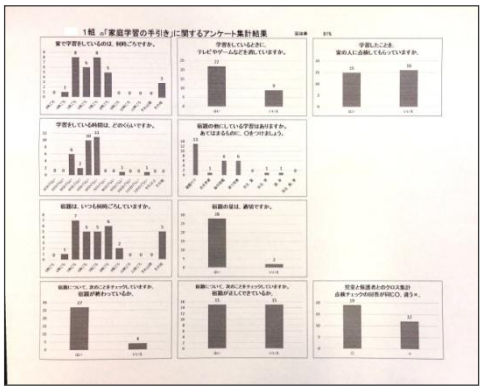
全体的なバランスに配慮し、統一感を持たせるようにした。
　以上のような作業を経て作成した「改訂版」を、２学期初めに各家庭に配布し、活用していくことにした。(【資料４】「家庭学習のてびき」参照)

　また、原案を作成するなかでは、部会内から次のような意見が挙がった。

・「時間」の項目で、目安とする時間を設定しているが、課題を進める速さに個人差があることを考慮して、課題の量（数）を決める必要がある。
・「時間」に関わって、児童が何時ごろに家庭学習をしているのか、という実態や、学校から設定した状況が適切なのかどうかを把握する必要がある。
・年度初めに「家庭学習のてびき」を配布したあとに、その活用の状況を確認し、その結果に応じて必要な対策をとりたい。

　これらの意見から、「改訂版」配布後に、その活用状況などを把握することを目的としたアンケート（【資料５】「家庭学習のてびき」に関するアンケート　参照）を実施することに決めた。アンケートの項目を決めるにあたっては、部会内の意見を反映させながら、主に次のような点に留意して検討した。

・児童と保護者に、同一用紙内で回答してもらう。
・「学習を始める時間」と「学習にかかる時間」の項目を設定し、児童と保護者の両方に質問することで、それぞれの把握状況を確認する。
・「学習にかかる時間」と「宿題の量の適切さ」の項目を関連させることで、宿題の量の適切さの度合いを確認する。
・「学習にかかる時間」について詳しく回答できるように記述式にすることで、家庭学習の時間の実態をより詳しく把握する。
・保護者にむけて「終わったか」「正しくできているか」の２段階の項目を設定することで、「家庭学習のてびき」にある宿題が終わったことの確認方法の実態を確認する。



　上記の点をふまえて作成したアンケートは、「家庭学習のてびき」配布の約２週間後に、児童と保護者を対象にした形で実施した。内容は、児童には「家庭学習のてびき」の記述に沿ったものを、保護者には家庭での学習の様子を把握できるものとした。そして、回収したアンケートは、学級ごとに集約して、項目ごとにグラフ化した資料を作成した。(【資料６】「家庭学習のてびき」に関するアンケートの集約結果〈例〉参照)
　アンケートの結果から見られた傾向については、例えば次のことが挙げられる。

・家庭学習は、どの学年でも、おおむね決まった時刻に始められている。ほとんどの児童が、午後４時から午後８時の間に当てはまる。
・家庭学習にかけられている時間は、おおむね「家庭学習のてびき」に示した目安の時間に当てはまる。
・宿題の量は、保護者のほとんどが「適切である」と回答している。
・「宿題をし終えたか」のチェックは、児童、保護者とも「している」で一致している一方、「宿題を正しくできているか」のチェックは、低学年では「している」が多く、学年が上がるに連れて「している」が減っている。　など

今回作成した資料は、各学年、学級担任から、結果の概略やおおまかな傾向、そして担任として感じたことを含め、学級通信などで保護者にむけて伝え、併せて「家庭学習のてびき」の内容と、活用を意識した家庭学習の取組を働きかけるようにした。

②　校内への「詩文などの作品」の掲示

子どもたちが優れた詩文などに触れ、豊かな言語感覚を磨くための掲示スペース増設をお願いし、今年度になって、廊下や壁面の掲示スペースが整備された。各学年の教室周辺以外にも、階段付近や児童玄関などに掲示スペースができたことを受けて、研究部からその活用方法について提起された。そこで、部会内で話し合うなかで、本研究に関連した項目として次のような意見が挙がった。

・各学年の掲示スペースには、学習の成果物として作文や俳句、視写の作品などの国語科に関連した内容が掲示されている。
・ことわざや慣用句、担任として児童に学ばせたい言葉を「おぼえたい言葉」などと題して掲示する取組は、単元の学習時期に合わせて掲示している。

そこで、普段の学校生活のなかで、児童が言語文化に触れられる機会を設けることをねらいとして、「詩文などの作品」の掲示を始めた。

掲示場所は各階に１か所で、掲示する作品選びには統一的な視点を持たせることとし、基本的に「１、２年」「３、４年」「５、６年」を対象にした作品を選ぶようにした。また作品を選ぶ基準については、まずは次の通りとし、児童の反応などをみて修正をしていくことにした。

・全体　　･･･「読みやすい」／「季節を感じられる」
・１～４年･･･「親しみやすい」／「声に出してリズムを楽しめる」
・５、６年･･･「これまでに学習してきた作品や、関連した作品」

掲示スペースの整備に合わせて夏休み明けから掲示を始め、２、３週間ごとに作品を替えている。児童の様子や反応について、部会内では次のような意見が挙がった。

・２０分休憩や昼休憩、特別教室から教室へ戻るときに、掲示スペースの前を通る児童が、立ち止まったり歩いたりしながら声に出して読み上げている。
・１階の「１、２年」を対象にした作品は、学年を問わず、興味を持って見ている。
・児童の関心が作品に向くように、教師が意図的に働きかける必要がある。

「詩文などの作品の掲示」は部会としての取組であるが、一方で、学年単位でも廊下などの掲示スペースに詩文や国語科に関する作品が、継続的に掲示されている。学年独自に、定期的に詩文などの作品を紹介するコーナーを設けているところもある。

今年度は、まずこうした活動を通して、児童が言語文化に触れることができる機会を設けて、興味や関心を抱きやすい環境を整えていくように取組をすすめる。

（３）成果と課題

＜成果＞

・「家庭学習のてびき」に関するアンケートの実施は、家庭での学習の様子を含めて、その活用状況を把握することが主な目的であったが、他の効果も見られた。
（例）・「家庭学習のてびき」の配布や内容を周知させることにつながった。
・宿題の提出状況やノート、プリントの字が改善した。
・家庭学習について、保護者の関心が高まった。
・家庭学習の課題に対する、保護者の意見や把握状況を確認できた。
・「詩文などの作品の掲示」の取組については、前述の通りになるが、掲示スペースの前で声に出して読み上げるなど、興味を持って見ている児童の姿が見られた。

＜課題＞

・「家庭学習のてびき」を継続的に活用させるためには、記載内容に関わる内容を通信などで触れたり、随時、学級で「家庭学習のてびき」の内容に触れたりして、意識が向くように働きかける必要がある。
・「家庭学習のてびき」に関するアンケートの結果から、「学習にかかる時間」と主に宿題の量とのバランスはとれているようだが、家庭学習が「宿題だけ」となっている児童への手立てが必要である。
・今後は「詩文などの作品の掲示」で使用した作品を「音読作品集」にまとめて配布することで、各学年や学級での詩文などを生かした活動と関連させた取組を考えたい。

Ⅳ　本研究の成果と課題

≪成果≫

・教師の指示が多く、児童の発言が少ない授業を改善するため、児童が視写・音読からの思いを語り、交流し、書いてまとめる授業を構築した。その結果、自分と同じ考えに共感し、異なる考えを参考にする姿が多く見られるようになった。

・日記や作文を書き、交流を広め深める活動から話題の共有が生まれ、互いの存在を認め合うこととなり、自己肯定感を育むことになった。それが児童の積極性や学習意欲として現れてきた。

・デジタルドリル教材などを使ってドリルタイムのプリントを系統立てたことで、基礎学力の定着が進み、教材選びの効率化も図れた。

・「家庭学習のてびき」を全職員で見直すことによって、現在の児童にあった内容となったことに加え、保護者に家庭学習の取り組みを知らせることで、宿題の提出状況の改善や家庭学習に対する意欲の高まりにつながった。

≪課題≫

・ドリルタイムの教材を研究主題である言語活動の充実に絞ったが、児童の課題解決のためには十分な時間の確保ができなかった。課題の精選、問題数の絞り込みなど、さらなる工夫がいる。

・「家庭学習のてびき」アンケートから新たな児童の実態も見えてきたが、今後はこの結果を学校と保護者が共有し、改善に向けた効果的な手立てを模索しながら、ともに取り組んでいきたい。

・学力向上推進検討会では検討委員から、学校の教育活動についての情報を地域にもっと発信してほしいという要望があった。ホームページなどでは、見る人が限られてしまい、今後の課題である。

・自分の思いや考えを持つことはできても、それをみんなの前で発表することに苦手意識を持っている子どもはまだ多い。この課題克服にむけて、今後もこの２年間の取り組みを継続し、さらに研究を進めていく。

【資料１】学習指導案様式

国語科学習指導案

新宮市立王子ヶ浜小学校
授業者　　○○　○○

１　日　時　　平成　　年　月　日（　）第○校時　○○：○○～○○：○○

２　学　年　　第○学年○組　（男子　　名　女子　　名　計　　名）

３　本校の研究仮説

　多様な音読（読む）活動と書く活動を行うことにより、国語を楽しむ態度を育てるとともに、国語の力を培うことができる。

４　単元名

５　仮説を実証するための単元を貫く言語活動

子どもたちに、「この単元でどんな力を付けたいのか」を考え、それにふさわしい言語活動を位置付ける。また、「その言語活動の特徴が単元の目標の実現にどのように結び付くのか」を明確にする。そして、それが研究仮説を実証することにつながるというように記述する。

６　単元について

（１）児童について

（２）単元構成について

導入	展開（知識・技能の習得）	まとめ（習得したことを活用）

（３）指導について

教材観も併せて記述する。

７　単元の指導目標

「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」のうち、当該単元で指導するものを選択（１つ又は２つ）

８　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	○○能力	○○能力	言語についての知識・理解・技能
～しようとしている。	～している。	～している。	～している。

９　単元の指導計画（全○時間扱い）

次	時	主な学習活動	指導上の留意点(・)と評価(◇)

10 本時の指導

（1）本時について～研究との関わり～

本時の授業について具体的に記述する。
・どの場面、どの言葉を扱うか
・どのような展開を考えているか
・どのような手立てをするか
・扱う場面を、子どもたちがどう読むか
・どの言葉から、どんな思いを持つか
・どの部分につまずくか
・授業者の思い

（2）目標

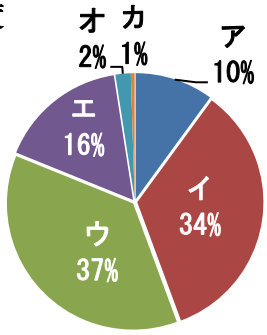
（3） 指導過程時間	主な学習活動	主な発問(○)と指示(△)	指導上の留意点(・)と評価(◇)

どの部分が研究と深く関わっているのか、参観者にも分かるように、〔研〕マークを付け、明示する。

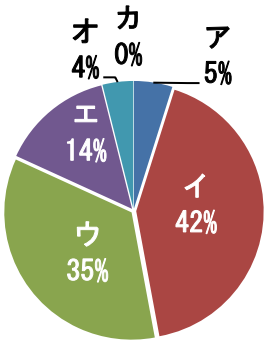
【資料２】「生活意識アンケート」〈平成２６、２７年度実施〉の結果

質問　あなたは、ふだんの日（土曜・日曜をのぞく）、家でどれくらい勉強をしていますか。（宿題や自分の勉強）

平成26年度



平成27年度

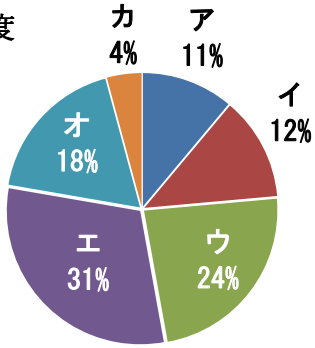


（注）グラフ内の選択肢の内容は、次の通り。
ア　ほとんどしない　　イ　３０分くらいまで　　ウ　３０分から１時間くらいまで
エ　１時間から２時間くらいまで　　オ　２時間から３時間くらいまで　　カ　３時間より多い

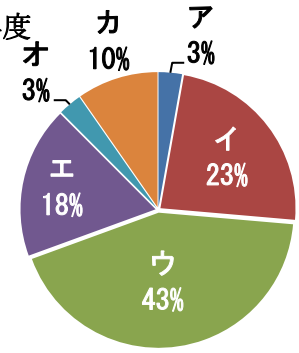
【資料３】全国学力・学習状況調査児童質問紙〈平成２６、２７年度実施〉の結果

質問　学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）

平成26年度

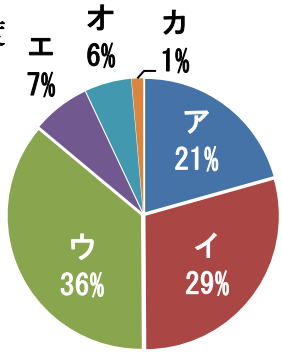


平成27年度

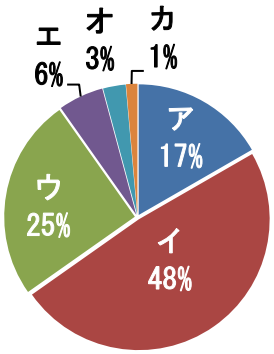


質問　土曜日や日曜日など学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）

平成26年度

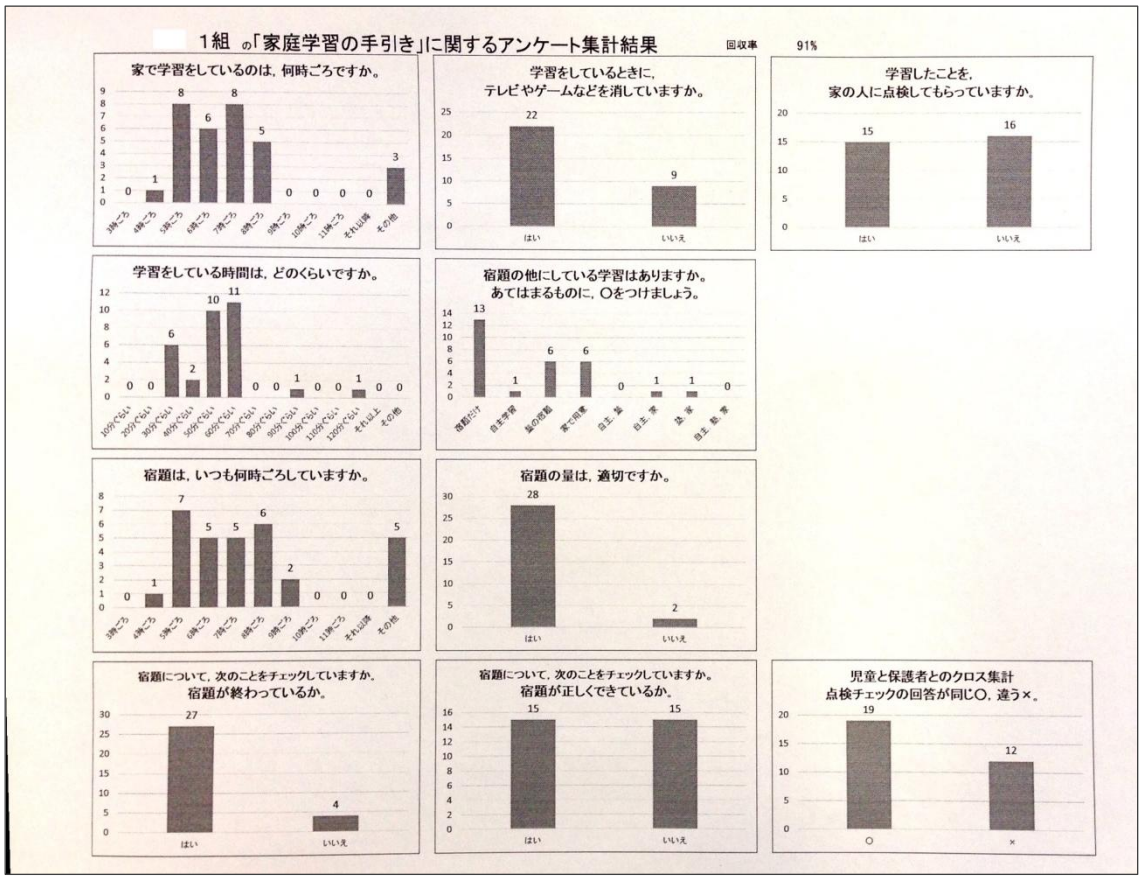


平成27年度



（注）グラフ内の選択肢の内容は、次の通り。
ア　全くしない　　イ　３０分より少ない　　ウ　３０分以上、１時間より少ない
エ　１時間以上、２時間より少ない　　オ　２時間以上、３時間より少ない　　カ　３時間以上

【資料６】「家庭学習のてびき」に関するアンケートの集約結果〈例〉



お　わ　り　に

平成２６年・２７年度 文部科学省・和歌山県教育委員会指定「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究」の協力校指定を受け、本日その研究成果を発表することになりました。一人ひとりの教職員が知と力を結集し、研究・協議を続けてくる中で想像以上の力が生まれ、授業改善が進みました。小さな前進ではありますが、今年度の「全国学力・学習状況調査」の結果にもあらわれてきています。

ここにその研究の一端をまとめました。ご覧頂ければありがたく存じます。本日の研究発表会はその研究の節目ではありますが、通過点であり、終点ではありません。研究を引き継ぎながらさらに工夫・発展させ、児童により確かな力を保証するための取組を継続していかなければなりません。研究主題でもあります「自ら考え、学び合い、意欲的に学習する子どもの育成」のための言語活動の更なる充実をめざし、引き続き努力する所存です。今後ともご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

最後に、ご指導・ご助言を頂きました諸先生方に深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

平成２７年１１月